

筆者追記（2025年11月25日）

『防衛大学校紀要第百三十輯』に掲載した「北朝鮮人民軍における火力発揮能力向上施策の創始—金正恩が『名射手・名砲手運動』に込めた意義—」の修正について

本稿の初版は、2025年（令和7年）3月発刊の『防衛大学校紀要第百三十輯』に掲載されたものですが、「名射手・名砲手運動」が創始された時期について下記の通り誤りがありました。

誤：「名射手・名砲手運動」の創始は2013年3月以降

↓

正：「名射手運動」の創始は2012年1月、「名砲手運動」の創始は2013年2月

これに対応して一部の不適切な表現と併せて若干の修正を行いました。このような至らぬ点がありましたことについて、筆者として、この場を借りて深くお詫び申し上げますとともに、本稿を修正版として謹んでサイトに再掲載させていただきます。

北朝鮮人民軍における火力発揮能力向上施策の創始
—金正恩が「名射手・名砲手運動」に込めた意義—

The initiation of fire power ability development policy in the Korean People's Army: The significance which Kim John-un included in "the Expert Campaign of Shooter and Gunner"

金子 悟史

キーワード：北朝鮮、金正恩、火力、名射手・名砲手運動

はじめに

北朝鮮人民軍では、2012年1月に「名射手運動」が、また、2013年2月に「名砲手運動」が始められ¹⁾、金正恩自らの発起により「名射手・名砲手運動」という火力の戦闘訓練における基本・基礎を強化する取り組みが創始された。これにより、競技会等を通じて朝鮮人民軍将兵に対して拳銃・小銃などの個人装備火器や火砲などの部隊装備火器の射撃練度向上を図ることが練成訓練の重点の一つとなっていました²⁾。

確かに、この運動の発起は、金日成軍事総合大学で学んでいたころから砲兵の運用や射撃術に高い関心と能力を發揮していたとされる金正恩の若年時の経験や³⁾、金正恩が主導したとされる2010年の延坪島砲撃の教訓が影響した可能性がある⁴⁾。

しかし、そもそも北朝鮮では金正恩政権発足以降、核・ミサイル装備などの開発が重視され、技術に立脚した精密打撃能力が強化され始めていたにもかかわらず、なぜ不安定な人的練度に依存する将兵個人や砲兵部隊の射撃能力向上も同時に追及されていったのであろうか⁵⁾。

先行研究では、北朝鮮の火力に関する戦法について、核・ミサイル装備の開発に関する研究は多くあるものの、火砲などの在来火器がどのように強化されてきたのかについて扱った研究は少ない⁶⁾。しかしながら、この運動の成立経緯や意義について分析をすることで、これまで多くの研究がされてきた北朝鮮人民軍の核・ミサイル分野の発展と併せて、金正恩期の火力に関する戦法の特性や全体像を明らかにできる意義がある。

さらに、金正恩が発起した「名射手・名砲手運動」に関する研究についても、その成立経緯や意義について分析を行ったものは見当たらず、この運動が金正恩の軍部隊視察で言及されたことを説明する報道や研究機関の情勢報告が見られる程度である⁷⁾。しかし、「名射手・名砲手運動」は、2021年1月、約5年ぶりに改訂された朝鮮労働党規約において党として重視する運動として規定されたことから、その地位に応ずる多くの意義が込められていた可能性がある。

そこで本稿は、金正恩が発起した「名射手・名砲手運動」には、単なる射撃能力向上の手段以上の意義があったのではないかという仮定に立ち、そこには、どのような意義が込められていたのかを問い合わせたいとして明らかにしていきたい。本稿は、まず、第一節において、「名射手・名砲手運動」が創始から定式化されていった経緯を時系列的に確認するとともに、その意義を明らかにするための論点を抽出する。次に、第二節において、その論点の分析を行い、「名射手・名砲手運動」に込められた意義を明らかにする。

1 「名射手・名砲手運動」の創始から定式化への経緯

本節では、まず「名射手・名砲手運動」が創始から定式化されていった経緯を確認するとともに、その意義を明らかにするための論点を抽出する。

(1) 「名射手・名砲手運動」の創始・成立

「名射手・名砲手運動」は、どのように創始され成立したのであろうか。金正恩は、政権を引き継いだ直後の2012年1月、部隊の現地視察において「名射手運動」を繰り広げることについて初めて言及したとされ⁸⁾、その約1年後、2013年2月の「朝鮮人民軍第323軍部隊視察（空軍特殊部隊）」においても、「軍人は、銃を良く撃たなければならない。人民軍隊で名射手運動を力強く広げていかなければならない」として「名射手運動」に公開視察の場においても言及していた⁹⁾。

次いで、翌月3月の「朝鮮人民軍第1973軍部隊視察（陸軍特殊部隊）」においては、予定されていた訓練視察、施設視察を行いつつ、「戦闘員達は政治思想的、軍事技術的、肉体的に準備されていると同時に、百発百中の射撃術を所有しなければならない」として、突然、大隊指揮官クラスの拳銃、自動小銃射撃訓練を組織・指導した¹⁰⁾。この射撃訓練において金正恩は、実際に一人の軍人に拳銃射撃をさせて、その射撃の目標板を大隊指揮官達に見せながら具体的な射撃の指導を行った¹¹⁾。

そもそも、金正恩は、2011年末に金正日から政権を引き継ぎ、最高司令官に就任して以降、月1回以上の軍部隊視察を行い、その都度、問題点を指摘してその場では正を指導していたが、金正恩自らが射撃の指導を行うことは異例であった。

さらに、この軍部隊視察において金正恩が各種射撃方法に関する録画物を作り全軍に下達し、戦闘射撃方法を統一させる指示を行っていたことを踏まえれば¹²⁾、単なる思い付きの運動ではなく、金正恩自ら何らかの問題認識と一定の決意の下、全軍に徹底することをあらかじめ計画した上で明示した運動であった可能性がある。

その後、この「名射手運動」を普及するため、約13年ぶりに金正恩期で初めて行われた2013年10月の「朝鮮人民軍第4次中隊長、中隊政治指導員大会」では、金正恩自らの発起により、異例となる射撃競技会が組織され、大会会場の屋内に射撃競技場を設け、部隊別、個人別の競技を進行して褒賞が行われた¹³⁾。興味深いことに、「名射手運動」を初めて具現したこの競技会は、その場が中隊長等が参集する大会であったことから、必然的にその対象は、中隊長という指揮官であり将校クラスであった。

他方、金正恩は、2013年2月に「名砲手運動」を繰り広げることについて発起したとされ¹⁴⁾、同年3月の「朝鮮人民軍第641軍部隊管下長距離砲兵区分隊視察」（170mm自走砲の部隊視察）において区分隊（中隊）を検閲した際に、「百発百中の名砲手として準備することは砲兵達の当然の本分であり、（中略）すべての砲兵達は、最初にも2番目にも3番目にも砲射撃の命中率を高めるところに基本を置き、砲兵訓練を見本となるように広げていかなければならない」と述べ、「名砲手運動」を推進し始めた¹⁵⁾。

なぜ金正恩は、政権を継承して約1年後の2013年に、これら「名射手運動」と「名砲手運動」の公開指導を活発に行い始めたのであろうか。確かにソウルを射程内に置く長距離砲（170mm自走砲）の精度向上施策を示すことで、同月に発足した韓国保守の朴槿恵政権に対して圧力を加える意図、すなわち国外的な要因があったとも解釈できるが、その主な理由は、政権継承後の1年目であった2012年は、金正恩にとって、まずは部隊掌握が主体であったからであるといえる。

金正恩は、2012年に軍公開活動、すなわち軍関連の視察を約32回行っていたが、最も多かった訪問先は陸軍部隊（17回）であった。その中でも集中的に視察を行った部隊は、韓国側と軍事分界線などで直接対峙する主に島嶼部の第一線部隊（8回）であった。

訪問した部隊は、西部戦線4か所¹⁶⁾、東部戦線3か所¹⁷⁾及び中部の板門店であり¹⁸⁾、これらの訪問は視察という名称ではあったものの、内容は部隊の配置を変更するなど指導が主体であったことから、いわば政権掌握後の第一線部隊の引き締めであり¹⁹⁾、これら第一線部隊の掌握等は他の軍部隊視察や軍の施策よりも重視されたといえる。

そして、「朝鮮人民軍第4次中隊長、中隊政治指導員大会」(2013年10月)において金正恩は、全軍で名射手、名砲手運動を力強く広げることに言及し²⁰⁾、小火器の射撃に関する将兵の基礎動作の練度向上を促す「名射手運動」と火砲の射撃に関する部隊の基本的行動の練度向上を促す「名砲手運動」の連結を行い、これらを一つの「名射手・名砲手運動」として推進していくことを明示した。

さらに、この「名射手・名砲手運動」は、2014年1月1日の「新年辞」において、「戦闘訓練を強化し、名射手、名砲手運動を力強く広げ、軍人達を百発百中の射撃術と銃鉄のような体力、強い規律性を帶びた一当百の戦う軍達に育てなければなりません²¹⁾」として、朝鮮人民軍の国防力強化における訓練の重点事項の一つとして初めて明文化されることとなった。

(2) 「名射手・名砲手運動」の実践・定式化

「名射手」運動は、その後も金正恩自ら主導し、朝鮮人民軍内において主に指揮官や軍学校の教員などの将校を対象とした射撃競技会を通じて普及されていくこととなった。2014年3月には、拳銃・自動小銃に関する「軍事学校教職員達の射撃競技²²⁾」(金日成政治大学、金日成軍事総合大学等が参加)、「軍種、軍団級単位指揮成員達の射撃競技²³⁾」(軍事指揮官と政治指導員に分かれて実施)、「金正淑海軍大学と金策航空軍大学教職員達の射撃競技²⁴⁾」が行われた。これらは、2014年1月の「新年辞」でうたわれた「名射手・名砲手運動」の推進に基づき、早速短期間であっても練成を行い、競技会として目に見える形で運動を具現しようとする施策であったといえる。

他方、「名砲手」運動も、朝鮮人民軍内の競技会を通じて普及されていくとともに、興味深いことに、時には金正恩自ら現場の砲兵部隊に対して褒賞等を行う形で、その成果が褒め称えられた。

金正恩は、2014年6月に東海岸前方哨所のファド防衛隊に対する砲射撃訓練視察を抜き打ちで行ったが、その成果が良好であるとして5中隊を「名砲手中隊」に命名し²⁵⁾、同じ年の7月、同じく東海岸前方哨所のウンド防衛隊の砲射撃訓練を視察した際にも、その命中精度を高く評価して防衛隊1中隊1小隊1砲に名砲手賞状を、軍人達には名砲手メダルと名砲手徽章を授与した²⁶⁾。

このように、金正恩が自ら名砲手中隊の命名や褒賞を行い、その部隊名も公表したことは、「名射手・名砲手運動」がいかに重要な施策であるかを軍部隊に示して競わせる狙いがあったと考えられ、将兵への激励や指導を主体とした記事の詳細な説明から見れば、これら褒賞等に对外的な武力誇示という示威的意図のみが込められていたとは考えにくい。

そして、「名射手・名砲手運動」は、再度、2014年11月の「朝鮮人民軍第3次大隊長、大隊政治指導員大会」の場で徹底され、金正恩は「初めて名砲手中隊の栄誉を得たファド防衛隊第5中隊の模範に従い、すべての大隊達が名射手大隊、名砲手大隊にならなければならない²⁷⁾」として、この運動を大隊規模にも拡大して引き続き推進していくことを明言した。

興味深いことに、この「名射手・名砲手運動」は、拳銃・自動小銃・砲身砲以外の火器にも適用されていくことになった。そもそも、「名砲手運動」について金正恩による公開指導が行われ始めたのは、当初、砲身砲である長距離砲兵部隊(170mm砲部隊)による訓練の場であったため²⁸⁾、その対象となる火器は、砲身砲が想定されていたと考えられる。しかし、この運動は、「朝鮮人民軍第851軍部隊管下女性放射砲区分隊砲射撃訓練」(2014年4月)などでも言及され、一般的に命中精度よりも地域制圧能力が求められる放射砲(107mm多連装ロケット砲)にも適用されるようになっていった²⁹⁾。

また、放射砲以外にも、2015年1月には、「朝鮮人民軍前線軍團第1梯隊歩兵師団直属区分隊の非反衝砲射撃競技大会」において、部隊における個人携行型対戦車火器である無反動砲についての競技が行われ、金正恩が自ら名砲手賞状、名砲手メダル、名砲手徽章を授与した³⁰⁾。

この競技会は、射程が1,500mほどの無反動砲の練度向上を図ることで³¹⁾、小銃の一般的な有効最大射程で

ある数 100m から、北朝鮮で最も射程が短い火砲の一つである 107 mm多連装ロケット砲の最小射程である数 km の間の盲点となる射距離を補い、その練度向上を図る処置であったといえる。

このように、「名射手・名砲手運動」の対象火器が、拳銃・自動小銃・砲身砲から多連装ロケット砲、対戦車無反動砲などに拡大されていった理由は、歩兵・砲兵などの兵種の違いに関わらず、あらゆる射程の火器について練度向上を図り、その射程の練度に盲点をなくす取り組みであったといえる。

その後、「朝鮮人民軍大連合部隊の砲射撃競技」（軍団別の砲身砲部隊の競技、2016 年 1 月）、「朝鮮人民軍大連合部隊別女性放射砲兵射撃競技」（軍団別の女性多連装ロケット砲部隊の競技、2016 年 11 月）、「朝鮮人民軍大連合部隊放射砲兵中隊射撃競技」（後方軍団別の多連装ロケット砲部隊の競技、2016 年 12 月）など、砲種別だけではなく女性部隊や軍団別でも抜けのない競技会が実施されていった³²⁾。

さらには、「高射砲兵射撃競技」（陸軍と航空及び反航空軍（以下、航空軍という。）の対空砲兵部隊の競技、2015 年 6 月）、「朝鮮人民軍軍団別迫撃砲区分隊の砲射撃訓練」（軍団別の迫撃砲部隊の競技、2020 年 4 月）などでも「名砲手運動」が言及され、砲種についても高射砲や迫撃砲にまで拡大することで、陸・海・空のあらゆる軍種別と射撃対象別の盲点が排除されていった³³⁾。

なお、2018 年から 2019 年は、米朝・中朝・中露・南北朝鮮間の活発な外交が行われたため、軍部隊視察自体が低調となっていたが、コロナ禍により軍部隊視察が途絶える直前のわずか 3 か月間である 2020 年 2 月から 4 月にかけて、砲兵訓練を 4 回、砲兵競技会を 2 回と、頻繁に視察し³⁴⁾、「人民軍砲兵武力を誰もが恐れる世界最強の兵種として強化³⁵⁾」し、競技会を通じて「全般的砲兵武力をもう一度覚醒させる³⁶⁾」ことが強調された。

その後、コロナ禍にあった 2021 年 1 月の朝鮮労働党第 8 次大会で改定された党規約では、「《一当百》の号砲を高く掲げ、吳仲治 7 連隊称号獲得運動、近衛部隊運動、名射手、名砲手運動を力強く広げ、部隊の政治軍事的威力を百方に強化する³⁷⁾」ことが明記され、国家の最高指導者や党を防護する運動（吳仲治 7 連隊称号獲得運動）、現代戦に合わせて部隊の戦闘力を強化する運動（近衛部隊運動）と同様に、朝鮮人民軍内の各級党组织が行う事業として位置づけられ定式化されることとなった。

したがって、「名射手・名砲手運動」は、活発な外交が行われた 2018 年から 2019 年、特に韓国文在寅政権との板門店宣言により南北朝鮮間で数多くの軍事的な緊張緩和の措置が取られていたにもかかわらず消滅せず³⁸⁾、さらには 2020 年春以降のコロナ禍においても生き続け、2021 年に党規約として定式化されたことを考えれば、国内外情勢には左右されない基本・基礎を徹底する軍の施策という位置づけが明確になっていたといえる³⁹⁾。

加えて、既に 2014 年頃から各種ミサイル開発が進行し 2017 年には米本土全域までを射程圏に置く核武力政策完成を宣言していたにもかかわらず⁴⁰⁾、2021 年に「名射手・名砲手運動」が党規約において党的事業として位置づけられたことは、この運動が各種ミサイル開発が進捗するまでの応急的・一時的な処置ではなかつたことを示しており、「名射手・名砲手運動」が各種ミサイル開発と同等の価値を持つ火力発揮能力向上施策であることを示していたといえる。（表 1⁴¹⁾）

表1 名射手・名砲手運動等の成立・定式化

時 期	行事等【】は砲の種類	意 義
2010年11月	延坪島砲撃事件	—
2011年12月	金正日死去に伴い金正恩が朝鮮人民軍最高司令官就任	—
2012年1月	金正恩が部隊の現地視察において「名射手運動」言及	「名射手」運動の創始
2013年2月	「朝鮮人民軍第323軍部隊視察」（空軍特殊部隊）にて「名射手運動」言及	—
2013年2月	金正恩が「名砲手運動」を発起	「名砲手」運動の創始
2013年3月	「朝鮮人民軍第1973軍部隊視察」（陸軍特殊部隊）にて射撃指導	—
2013年3月	「朝鮮人民軍第641軍部隊管下長距離砲兵区分隊視察」にて「名砲手運動」言及	—
2013年10月	「第4次中隊長、中隊政治指導員大会」にて「名射手・名砲手運動」言及	「名射手・名砲手運動」の成立
2014年1月	「新年辞」で「名射手・名砲手運動」明記	「名射手・名砲手運動」の実践
2014年3月	【拳銃・自動小銃】「軍事学校教職員達の射撃競技」、「軍種、軍団級単位指揮成員達の射撃競技」、「金正淑海軍大学と金策航空軍大学教職員達の射撃競技」	「名射手運動」の実践
2014年4月	【対海上多連装ロケット砲】「朝鮮人民軍第851軍部隊管下女性放射砲区分隊砲射撃訓練」	「名砲手運動」の実践
2014年6月	【対海上海岸砲（推定）】ファド防衛隊を名砲手中隊に命名	
2014年7月	【対海上海岸砲】ウンド防衛隊に名砲手賞状等授与	
2014年11月	「第3次大隊長、大隊政治指導員大会」にて「名射手・名砲手運動」徹底	
2015年1月	【対戦車無反動砲】「朝鮮人民軍前線軍団第1梯隊歩兵師団直属区分隊の非反衝砲射撃競技大会」	
2015年6月	【対空機関砲】「高射砲兵射撃競技」	
2016年1月	【対地上砲身砲】「朝鮮人民軍大連合部隊の砲射撃競技」	「名砲手運動」の実践
2016年11月	【対地上多連装ロケット砲】「朝鮮人民軍大連合部隊別女性放射砲兵射撃競技」	
2016年12月	【対地上多連装ロケット砲】「朝鮮人民軍大連合部隊放射砲兵中隊射撃競技」	
2020年3月	【対地上砲身火砲・対地上多連装ロケット砲】「砲射撃対抗競技（7・9軍団と3・4・8軍団を別目に分けて実施）」	
2020年4月	【対地上迫撃砲】「朝鮮人民軍軍団別迫撃砲区分隊の砲射撃訓練」	「名射手・名砲手運動」の定式化
2021年1月	朝鮮労働党第8次大会にて党規約に「名射手・名砲手運動」が記載	

(3) 小括

「名射手・名砲手運動」は、2012年1月に「名射手運動」が、また、2013年2月に「名砲手運動」が創始され、2014年1月の「新年辞」において明文化された。その後、競技会や現地視察における褒賞等を通じて推進され、2018年頃の南北間の軍事的緊張緩和により弱まるどころか再び覚醒され、2021年1月の朝鮮労働

党規約改定では、確固とした党の事業の一つとして位置づけられていった。

この運動は、金日成期に創始された「砲兵重視思想⁴²⁾」を継承する施策であり、金正恩が金正日に比し、陸軍部隊の中で機動部隊よりも火力戦闘部隊の運用を重視する思想の現れであったといえる⁴³⁾。事実、金正恩期においては、2012年以降、主力戦車が350両であり数に概ね変化がない中、火砲は21,000門から21,600門へ少なくとも500門増加したと見積もられており⁴⁴⁾、「名射手・名砲手運動」についても、機動部隊の中心戦力である戦車射撃という火力を含めてはいなかつた。

第1節では、「名射手・名砲手運動」の創始から定式化までの経緯を確認したが、ここでいくつかの論点が生じる。そもそも、名射手・名砲手運動あるいはそれに類似する運動は、金正恩期以前にはなかったのであろうか。なかったのであればなぜ金正恩はこの運動を創始したのであろうか。また、単なる射撃能力向上のための運動であったとするならば、なぜ「名射手運動」は第一線部隊の兵士ではなく、主に指揮官や教員などの将校クラスを対象として行われたのであろうか。なぜ「名砲手運動」においては金正恩が自らの現場部隊に対する褒章などを行ったのであろうか。そもそも技術に立脚した精密打撃能力が強化され始めていたにもかかわらず、なぜ「名射手・名砲手運動」という人的練度に依存する運動も推進され、特に盲点のないあらゆる火器・部隊等で推進していく必要があったのであろうか。

2 「名射手・名砲手運動」に込められた意義

本節においては、第一節において生じた論点について、さらに金正恩の現地指導等における発言や行動等から解釈を行い、「名射手・名砲手運動」に込められた意義を明らかにする。

(1) 射撃の訓練練度向上に資する意義—金日成時期からの訓練指導の継承・発展—

そもそも、名射手・名砲手運動あるいはそれに類似する運動は、過去にはなかったのであろうか。これと類似した訓練指導の考え方とは、金日成期からないわけではなかった。

金日成は、1947年1月に「すべての軍官達と下戦士達がすべて百発百中の名射手となるようにしなければなりません⁴⁵⁾」、砲兵についても「砲兵達は、砲兵訓練を精力的に行い（中略）、名砲手にならなければなりません⁴⁶⁾」として、朝鮮人民軍の前身部隊である保安部隊に対する演説で訴え、既に朝鮮戦争（1950年～1953年）前から「名射手」、「名砲手」という用語を使い始めていた。

ただし、当時は、弾薬を含む砲兵装備をソ連からの供給に依存し量が十分ではなかったため、特に後者の名砲手となるべき主な理由は、人民の血汗がにじんだ砲弾一発も無駄にしてはならないためであった⁴⁷⁾。しかし、約2年後の朝鮮戦争に向けて「敵を単発で掃滅することができるよう百発百中の砲射撃術を修得する⁴⁸⁾」ことも求められたことから、既に金日成期から小火器の射撃に加え、砲兵の射撃についても命中精度を求める姿勢が存在していたといえる。

これら、「名射手」、「名砲手」となることを求める訴えは、時代が変わり1975年2月の朝鮮労働党中央委員会第5期第10回総会での結語においても、人民軍全ての軍人が、①強靭な革命精神、②巧みな戦術、③鋼のような体力、④百発百中の射撃術を所有し、人民軍の隊内に⑤鉄の軍事規律を確立すべきであるとする「5大方針」という基本教育の方針の4つ目として提示されていた⁴⁹⁾。

ただし、この「百発百中の射撃術」は、「いかなる目標であっても単発で掃滅することができる百発百中の射撃術を所有した名射手、名砲手として育てる」と説明されていたことから、単に小銃・拳銃の射撃だけではなく、砲兵の射撃についても包含した内容であった。

その後、金正日についても、例えば「火力服務訓練は、命中率を高めるところに基本を置き進行しなければならず、射撃速度を高めるところに重点を置けば、実戦では砲弾が浪費される」と述べていたことから、金正日も命中精度を重視する方針を継承していたといえる⁵⁰⁾。

この際、金日成が再度提示した「百発百中の射撃術」は、訓練の「方針」であったことから、その方針を具現して実行する権限と責任は軍部隊指揮官にあるため、方針の実行が不徹底となる恐れがあった。したがって、金正恩は、朝鮮戦争前から見られた「名射手」、「名砲手」となる訴えが、「百発百中の射撃術」を所有すべきであるという号砲に埋没しがちであった中、再度「名射手」、「名砲手」という用語を持ち出して、これらを「方針」から軍部隊に直接行動を促す軍人大衆の「運動」へと転換し、競技会等を行う実行施策へと発展させていったといえる。

そうであるならば、なぜ金正恩は、単なる方針から実行施策へと進化させ「名射手・名砲手」を育てる「運動」を創始する必要があったのであろうか。そこには、金正日期から継承した朝鮮人民軍の将兵の射撃能力と砲兵の射撃能力に対する不満があったといえる。

そもそも、金正恩が最初に公開視察の場で「名射手運動」に言及した際の視察部隊は、先述の通り 2013 年 3 月の「朝鮮人民軍第 323 軍部隊⁵¹⁾」と「朝鮮人民軍第 1973 軍部隊⁵²⁾」であったが、いずれも射撃に関しては個人の高い練度が求められる特殊部隊であったといわれている。金正恩が、第 1973 軍部隊において突然射撃訓練を組織して射撃能力を検閲しただけではなく、射手が撃った「目標板」を用いて指導も行った理由は、精銳の特殊部隊にもかかわらず射撃の練度が不十分であり、これに不満を感じたためであったことがうかがえる。

また、砲兵の射撃能力についても、金正恩は、2013 年 6 月の「朝鮮人民軍第 851 軍部隊の砲射撃訓練」の視察において、火力訓練を集中的に実戦のような状況や最も極悪な条件で行うべきであり、形式主義的な訓練などを「絶対に」するべきではないなどの多くの問題点を提議し⁵³⁾、2014 年 4 月の「朝鮮人民軍第 681 軍部隊管下砲兵区分隊砲射撃訓練」では、「機動展開時間を短縮し、戦闘射撃速度を高めるための訓練が良くできなかった」、「ここ区分隊と該当部隊の指揮官達の心は戦いの場を離れている」として、金正恩期の軍部隊視察では初めてとなる部隊に対する公開叱責を行い強い不満を漏らしていた⁵⁴⁾。

金正恩が砲射撃の理想としていた能力は、その後、同様の競技会に関する記事で説明されている砲射撃競技の評価基準から、高い命中精度で射撃できる能力と迅速な展開能力であったが⁵⁵⁾、この時、金正恩が問題視していたのは後者であったといえる。

他方で金正恩は、命中精度についても、2015 年 12 月の「朝鮮人民軍第 4 次砲兵大会」で、「試射なく単発で命中すること」を砲兵訓練で到達しなければならない基本目標として立てるなど、初弾の命中精度に異常なまでのこだわりを持っていました⁵⁶⁾。

その理由は、奇襲的に行われた延坪島砲撃に見られるように、質に勝る韓国側からの火砲等の撃ち返しによる損害を考えれば、北朝鮮による砲兵射撃の勝ち目は最初の奇襲的な第一撃にあるため、試射による企図の暴露よりも、事前の計算により必要な射撃諸元を把握した上で、不意的に行う射撃により奇襲効果を確保する射撃方法を重視していたからであったといえる。

このこだわりから見れば、そもそも金正恩が政権を継承する前の 2010 年 11 月に、延坪島砲撃事件で発射した約 170 発のうち、同島に着弾した弾が半数以下の約 80 発であった事実は⁵⁷⁾、同島が北朝鮮が用いた火砲の射程内であったと見積もられることを踏まえれば失敗であったといわざるを得ず、この砲撃を主導したと言われる金正恩にとって納得のいく成果であったかが疑わしい。

事実、金正恩が政権を継承した後の延坪島を模した島に対する 2013 年 3 月の実弾射撃訓練では、同島の韓国側の軍事指揮所、火器や戦車の陣地などの軍事施設を仮想した個別具体的な目標を定めて訓練をしていた一方で⁵⁸⁾、2018 年 9 月の南北首脳会談において金正恩が韓国側の文在寅大統領に「いつか延坪島を訪問し、砲撃事件で苦しんだ住民を慰労したい⁵⁹⁾」と漏らしていたことを考えれば、そもそも命中精度の観点で延坪島砲撃の成果について不満があり、特に砲撃の目標はあくまで軍事施設のみに限定したかった願望がうかがえ

る。

そもそも金正日期の陸上部隊に関する改革の焦点は、砲兵戦力の強化よりも、装備の車両化による機動力の強化（砲兵戦力の機動力強化や砲兵戦の規定・教範類の編纂も含む。）が部隊の編成・装備上の改革の焦点であったといえる⁶⁰⁾。加えて、健康上の理由もあり、金正日が晩年の3年間で第一線部隊の視察をほとんど行わず、思想的な戦闘力強化の促進を目的としていたとはいえ、軍部隊視察の主体が軍人による公演観覧であった事実も⁶¹⁾、金正恩が政権継承前から朝鮮人民軍の砲兵射撃能力向上について強く推進する必要性を感じさせた一因であったであろう。

以上のように、「名射手・名砲手運動」は、将兵の射撃能力及び砲兵部隊の射撃能力向上のための手段として発展していったといえるが、その源泉は、金日成が提示した「名射手」、「名砲手」となることの訴えまでさかのぼることができ、これに対して金正恩は、将兵個人及び砲兵部隊の射撃能力の実態からその向上の必要性を感じ、「百発百中の射撃術」などの金日成の訓練方針を単に継承するだけではなく「運動」という実行施策へ発展させていったといえる。

（2）指揮官の統率能力向上に資する意義—指揮官の率先垂範能力向上—

なぜ「名射手運動」は、第一線部隊の兵士ではなく、主に指揮官や教員などの将校を対象として行われたのであろうか。そこには、金正恩の朝鮮人民軍指揮官クラスに求める統率觀があったといえる。

金正恩は、2013年10月の「朝鮮人民軍第4次中隊長、中隊政治指導員大会」において、「中隊長、中隊政治指導員達が銃を良く撃ってこそ、軍人達を百発百中の名射手に育てることができる⁶²⁾」と述べ、2014年3月の「軍事学校教職員達の射撃競技」でも、「軍事教育機関の全ての教職員達から高い射撃術を持っていなければならない⁶³⁾」、同月の「軍種、軍団級単位指揮成員達の射撃競技」においても「指揮成員達から名射手にならなければならない⁶⁴⁾」と述べ、軍人全体の射撃能力向上のためには、まず、それを指導する指揮官クラスの将校から射撃術を高めなければならないという考え方を繰り返し主張していた。

興味深いことに、金日成も朝鮮戦争前の1948年には、「戦士達を百発百中の名射手に育てようとするならば、まず指揮官達自身が名射手とならなければなりません」と述べていた⁶⁵⁾。したがって、この指揮官に対して射撃に関する率先垂範を求める姿勢は、金正恩期になってから再度強調され始めたといえる。

その背景には、金正恩が抱く朝鮮人民軍の各級指揮官が持つべき統率に関する理想像があったといえる。例えば、同じ時期である2014年11月の「朝鮮人民軍第3次大隊長、大隊政治指導員大会」の演説において、金正恩は、「名将の下に弱兵はない、軍人を虎に育てようとすれば、指揮官から頭が雷のように回り、軍事技術水準が高く、いかなる肉体的負担も良く勝ち抜いていけることができる野戦型の指揮官、現代戦の能手にならなければならない⁶⁶⁾」として、指揮官がまず模範となるべきことを強調し、このことは、あらゆる訓練の場で述べられていた。

したがって、金正恩が「名射手運動」の対象を「指揮成員達と軍人達⁶⁷⁾」に分けてとらえていた理由は、例え同じ射撃能力であっても、指揮官クラスに求める模範的で統率に資する意義と現場の軍人達に求める実戦的で戦闘に資する意義では、その意義が異なるためであったためといえる。

そもそも同じ時期、このような金正恩の指揮官の率先垂範という統率觀は、射撃以外の分野においても求められていた。海軍においては、東西艦隊のすべての指揮官を集めた片道5kmの海上遠泳という「朝鮮人民軍海軍指揮成員達の水泳能力判定訓練」（2014年7月）を行い⁶⁸⁾、航空軍の師団長、旅団長及び連隊長等に対しては「朝鮮人民軍航空及び反航空軍飛行指揮成員達の戦闘飛行術競技大会」（2014年6月）に参加させ自ら航空機を操縦させ⁶⁹⁾、陸軍においては「西部戦線機械化打撃集団装甲歩兵区分隊達の冬季渡河攻撃演習」（2015年1月）において、朝鮮人民軍総政治局長と人民武力部長を戦闘装甲車両と自走砲に乗車させ渡河戦闘を指揮させていた⁷⁰⁾。

金正恩は、このような徹底した指揮官訓練を行う理由を、「(突撃前へ！ではなく⁷¹⁾) 指揮官の《自分に続いて前へ！》の号令が戦闘訓練場で高く上がらなければならない」として説明し、一貫して指揮官の率先垂範を繰り返し強調していた⁷²⁾。

したがって、指揮官の率先垂範能力向上、すなわち指揮官の統率能力向上は、射撃能力以外にも各軍種において求められており、むしろ、指揮官の射撃能力向上は、指揮官の統率能力向上施策の一部であったという見方ができるといえる。

(3) 将兵の士気高揚に資する意義—将兵に対する目標と誇りの付与—

なぜ「名砲手運動」において金正恩自らの現場部隊に対する褒章などが必要とされたのであろうか。そこには、将兵に対する目標と誇りの付与による士気高揚に資する意義があったといえる。

金正恩は、名砲手運動創始期から軍部隊視察において、平時に「一当百」名砲手運動を力強く広げ、仇との決戦で敵艦船を水葬して必ず英雄砲兵になりなさいという趣旨の発言を行い⁷³⁾、砲兵射撃能力向上の目的が単なる戦闘の成功だけではなく、朝鮮人民軍の英雄となることにつながる意義を強調していた。

また、2015年1月の「前線軍団第1梯队歩兵師団直属区分隊の非反衝砲射撃競技大会」では、金正恩自ら名砲手賞状、名砲手メダル、名砲手徽章を授与しつつ、「2015年初の名砲手達は、(中略)《近衛部隊自慢歌》を矜持高く歌い、部隊に堂々と帰ることができるようになった⁷⁴⁾」として、射撃能力向上を評価するよりも、むしろ、名砲手として褒賞された栄誉をほめたたえていた。

そもそも、競技会を練度向上の手段として活用して、その優秀者、優秀部隊を褒賞する訓練指導法は、一般的に西側諸国の軍隊では多用されるが、北朝鮮においても金正恩が多用する訓練指導法であったといえる。金正恩期の主要な軍関連の競技会は、公開されているものだけでも次のようなものがあった。(表2⁷⁵⁾)

表2 金正恩期の軍競技会（2012年～2023年）

軍種等	競技会名称
陸 軍	<ul style="list-style-type: none"> ・「朝鮮人民軍前線軍団第1梯隊歩兵師団直属区分隊の非反衝砲射撃競技大会」（2015年1月◎） ・「朝鮮人民軍戦車兵競技大会」（2016年3月○、2017年4月○） ・「朝鮮人民軍大連合部隊の砲射撃競技」（2016年1月○） ・「朝鮮人民軍大連合部隊別女性放射砲兵射撃競技」（2016年11月○） ・「朝鮮人民軍大連合部隊放射砲兵中隊射撃競技」（2016年12月○） ・「朝鮮人民軍第7軍団と第9軍団管下砲兵部隊達の砲射撃対抗競技」（2020年3月○） ・「朝鮮人民軍西部戦線大連合部隊の砲射撃対抗競技（3・4・8軍団）」（2020年3月○）
航空軍	<ul style="list-style-type: none"> ・「朝鮮人民軍航空及び反航空軍飛行指揮成員達の戦闘飛行術競技大会」（2014年6月◎、2015年7月△、2016年12月○、2017年6月○、2019年11月○）
特殊部隊	<ul style="list-style-type: none"> ・「朝鮮人民軍特殊作戦部隊降下及び対象物打撃競技大会」（2017年4月◎） ・「島占領のための朝鮮人民軍特殊作戦部隊の対象物打撃競技」（2017年8月○）
軍種統合活動	<ul style="list-style-type: none"> ・「軍種、軍団級単位指揮成員達の射撃競技」（2014年3月△） ・「高射砲兵射撃競技」（2015年6月○）
備考	（ ）内の◎は金正恩が自ら褒賞を行った競技、○は金正恩が立会いの下褒賞を行った競技、△は金正恩の参加が不明

確かに、競技会形式を多用した練度向上と最高司令官からの直接的な褒賞の授与は、1960年代後半の金日成期に見られた訓練指導法であった⁷⁶⁾。しかし、金正日期には見られなかつたことから金正恩期に入って再度多用されたものといえる。

これら競技会のうち、金正恩が自ら褒賞を行った競技会あるいは立会いの下で褒賞を行った競技会は、陸軍では「朝鮮人民軍前線軍団第1梯隊歩兵師団直属区分隊の非反衝砲射撃競技大会」、航空軍では「朝鮮人民軍航空及び反航空軍飛行指揮成員達の戦闘飛行術競技大会」、特殊部隊では「朝鮮人民軍特殊作戦部隊降下及び対象物打撃競技大会」などがあり、特に初めて軍種で行う競技会においては、金正恩が直接褒賞を行うことが着意されていた。

ただし、砲兵に関する競技会で特筆すべきは、部隊には名砲手賞状、個人には名砲手メダル、名砲手徽章などの目に見える褒賞を複数種類準備し授与していた点であり、時にはその功績を更にほめたたえるため、金正恩自ら「大隊の驚くべき戦闘力に感服した。大いに満足し特別感謝を与える。金正恩、2020.3.20」などと親筆による感服と感謝を表すコメントを賞状に書き添え、その賞状を新聞記事において写真で紹介する場合もあった⁷⁷⁾。したがって、特に砲兵に関しては褒賞内容も公開し、将兵に対して特に名誉を与えることが着意されていたといえる。

これは、同じ時期、金正恩が航空軍の第一線部隊航空操縦手に対しても食事、昇任、休暇、家族への配慮を格別に処置していたことを考えれば⁷⁸⁾、指揮官の統率能力向上施策と同様に、各軍種共通的に行われていた士気高揚施策の一つであつたといえる。

この際、砲兵に対して褒章が特に着意された背景には、金正恩が「名射手・名砲手運動」創始期に砲兵を名砲手にすることは延ばすことができない戦闘課業と述べていたように⁷⁹⁾、練度向上の緊急性があつたためであるといえ、さらに2014年の砲兵部隊に対する公開叱責は、航空軍の操縦手への厚遇とは対照的に受け止められ、一定の落胆を感じたであろう砲兵部隊に対して士気高揚に着意すべき余地が多くあつたものと考えられる⁸⁰⁾。

これら競技会を活用した練成方式は、金正恩が戦車兵競技会の視察において戦闘的士気と訓練に対する欲望、能力を高めるため良い訓練方法である⁸¹⁾と述べているように、競技会形式により訓練意欲を高め、効果的に個人の戦技能力、部隊の戦闘能力を向上させる狙いがあったといえる。

したがって、「名砲手運動」における褒賞は、あらゆる砲兵等部隊を対象にして、練成に成果があれば公平に評価されるという場を与えて明確な目標を付与するとともに、国家指導者あるいはその立ち合いによる褒賞という最上位の名誉を与えて誇りを付与し、これらにより訓練意欲を高め将兵の士気を高揚させる取り組みであったといえる。

(4) 火力戦法全体の強化に資する意義—精密射撃・打撃能力向上の一翼—

そもそも技術に立脚した精密打撃能力が強化され始めていたにもかかわらず、なぜ「名射手・名砲手運動」という人的練度に依存する運動も推進され、特に盲点のないあらゆる火器・部隊等で推進していく必要があったのであろうか。

「名射手・名砲手運動」が2012年から2013年にかけて創始され、翌年の2014年1月の「新年辞」において成立して以降、拳銃・小銃・火砲等の射撃競技会が進行していく一方で、金正恩は、2014年6月に「超精密化された戦術誘導弾試験発射」を公開指導し⁸²⁾、戦術ミサイル武器をさらに多く開発していくことも明言していた。

そして2015年以降、金正恩は、「新型反艦船ロケット試験発射⁸³⁾」(2015年2月)、「戦略潜水艦弾道弾水中試験発射⁸⁴⁾」(2015年5月)、「反戦車誘導武器試験射撃⁸⁵⁾」(2016年2月)、「新型の反航空要撃誘導武器体系の戦闘性能判定のための試験射撃⁸⁶⁾」(2016年4月)などを指導し、対海上・対陸上(対戦車含む)・対空などの盲点のない戦術ミサイル武器開発を行いつつ、2016年3月には、火砲というよりはもはや戦術ミサイルとして分類すべき「新型大口径放射砲試験射撃」(誘導弾を使用可能な300mm多連装ロケット砲)を指導し、この成功により「南朝鮮作戦地帯内の主要打撃対象を射程圏内に置いた⁸⁷⁾」ことを明言した。

そもそも「名射手運動」の創始は、金正恩が2012年1月に北方のある部隊を現地指導視察した際に言及し、その後、広がった運動であると言われている⁸⁸⁾。

他方で、「南朝鮮作戦地帯内の主要打撃対象を射程圏内に置いた」とした「新型大口径放射砲試験射撃」(2016年3月)も、その4年前の2012年に金正恩が直接発起して開発を開始していたことを考えれば⁸⁹⁾、金正恩が2011年末に政権を継承した時期に、「名射手運動」と各種ミサイル開発が同時に着想されていたことになる。

これらの意味で、金正恩は拳銃・自動小銃・火砲の人的な練度向上、すなわち「名射手・名砲手運動」と技術に立脚した戦術ミサイルの開発を、同じ火力発揮手段として同じ時期に着想し、精密射撃・打撃能力向上として、その能力向上を同時に模索していたといえる。

その背景には、2010年の延坪島砲撃事件における低い命中率、すなわち170発中80発という同島への着弾率もさることながら、着弾した弾薬のうち20発が不発弾であったことに対する不満⁹⁰⁾、換言すれば、砲兵の射撃練度だけではなく火砲や弾薬の技術的信頼性に対する不満もうかがえ、これらのことが政権継承後の金正恩に両者の能力向上を同時に模索させた原因という推測も成り立つであろう。

その後、興味深いことに金正恩は、これら二つの能力向上を同質の火力発揮能力向上の施策ととらえていた。金正恩は、2017年5月の「精密操縦誘導体系を導入した弾道ロケット試験発射」を指導した際に、「この弾道ロケットは、まるで名射手が狙撃手歩銃で目標を当てたようである⁹¹⁾」として、名射手による射撃の延長線上に弾道ミサイルによる打撃をとらえて、両者が火力の発揮という意味では同質のものであるという捉え方をしていた。

加えて、2019年5月の「東部戦線防御部隊の火力打撃訓練」は、「名射手・名砲手運動」をさらに推進する

目的で行われたが、訓練対象となった火器は、大口径長距離放射砲（240mm多連装ロケット砲）だけではなく戦術ミサイルも参加していたことから、「名射手・名砲手運動」に、もはや人的練度に依存する火砲と技術に立脚した戦術ミサイルに区別がない捉え方をしていたといえる⁹²⁾。

確かに、命中精度の観点では、多連装ロケット砲は基本的に人的練度に依存し、戦術ミサイル武器は技術に依存する火器であるものの、両者は隠蔽された位置から部隊行動によって迅速に射撃陣地に進出し、射撃を行った後は敵からの撃ち返し火力を避けるため迅速に退避する能力が求められる意味では、同じように人的練度に依存する運用上の特性がある。このことを考えれば、両者が「名砲手運動」の対象としてみなされることは不自然とはいえない。

したがって、砲身砲の射撃競技大会も小銃のような狙撃のように命中した点数による評価方法で進行され、既に「名射手運動」と「名砲手運動」が同質のものとしてとらえられていた中で⁹³⁾、「名射手・名砲手運動」における多連装ロケット砲と戦術ミサイルも、同じ火力装備体系として同質のものとして扱われていたといえる。

他方、金正恩期に入り核・ミサイル開発も同時に推進されていった。そもそも核・ミサイル開発は、金正日時期に2回の核実験と共に「スカッド型」や「ノドン型」などの核兵器の運搬手段の開発も行われており、金正恩もこの核・ミサイル開発を継承し、政権を継承した約3か月後の2012年4月の憲法改正では「核保有国」であることが明記された。その後、2013年には2月に3回目の核実験を行い、3月の朝鮮労働党中央委員会総会では「経済建設と核武力建設の並進路線」を採択していた⁹⁴⁾。

ただし、金正恩時期の核・ミサイル開発、特に戦略ミサイル武器開発は、政権継承後から間を置き、約4年後の2016年頃から主に「北極星型」や「火星型」などを通じて本格化していった⁹⁵⁾。その結果、2017年5月の「地上対地上中長距離戦略弾道ロケット《火星-12》型試験発射」では、米国の「ハワイとアラスカを射程圏内に置いた」ことを確認し⁹⁶⁾、同年7月の「大陸間弾道ロケット《火星-14》型試験発射」では、「米本土全域を射程圏内に置いた」ことを確認した⁹⁷⁾。その後、同年11月の「大陸間弾道ロケット《火星-15》型試験発射」においては国家核武力の完成を宣言した⁹⁸⁾。（表3）

表3 核及び戦術・戦略ミサイル武器開発の進行過程（金正恩期）

時 期	内 容	意 義	
2012年12月	人工衛星「光明星-3」号・2号機発射	核・ミサイル開発の継承	
2013年2月	第3回核実験		
2013年3月	朝鮮労働党中央委員会総会では「経済建設と核武力建設の並進路線」を採択	核・ミサイル開発加速化の宣言	
2014年6月	「超精密化された戦術誘導弾試験発射」	戦術ミサイル武器開発	戦術ミサイル武器開発開始
2015年2月	「新型反艦船ロケット試験発射」		対海上ミサイル武器開発
2015年5月	「戦略潜水艦弾道弾水中試験発射」		対海上・対地上ミサイル武器開発
2016年1月	第4回核実験		(核開発の継続)
2016年2月	「反戦車誘導武器試験射撃」		対戦車ミサイル武器開発
2016年3月	「新型大口径放射砲試験射撃」(300mm多連装ロケット砲、最大射程200km)		戦術ミサイル武器の完成(南朝鮮作戦地帯内の主要打撃対象が射程圏内)
2016年4月	「新型の反航空要撃誘導武器体系の戦闘性能判定のための試験射撃」		対空ミサイル武器開発
2016年6月	「地上対地上中長距離戦略弾道ロケット『火星-10』型試験発射」		戦略ミサイル武器開発開始(火星型)
2016年9月	第5回核実験		(核開発の継続)
2017年2月	「地上対地上中長距離戦略弾道弾『北極星-2』型試験発射」		戦略ミサイル武器開発開始(北極星型)
2017年5月	「地上対地上中長距離戦略弾道ロケット『火星-12』型試験発射」	戦略ミサイル武器開発	戦略ミサイル武器開発概成(ハワイとアラスカが射程圏内、核弾頭搭載可)
2017年7月	「大陸間弾道ロケット『火星-14』型試験発射」		戦略ミサイル武器開発概成(米本土全域が射程圏内、核弾頭搭載可)
2017年9月	第6回核実験		(核開発の継続)
2017年11月	「大陸間弾道ロケット『火星-15』型試験発射」		国家核武力の完成

表3のように時系列で確認すると、戦術ミサイル武器開発と戦略ミサイル武器開発は、前者の開発が軌道に乗った2016年頃から後者の開発が本格的に開始されたことがわかる。したがって、この意味で両者の開発は同時並行的に推進されていったとは言えない。

しかし、「新型大口径放射砲試験射撃」(誘導弾を使用可能な300mm多連装ロケット砲)の戦術ミサイル武器開発をもって「南朝鮮作戦地帯内の主要打撃対象が射程圏内」になったことを明示した後、「火星型」の戦略ミサイル武器開発をもって当初「ハワイとアラスカが射程圏内」となり、じ後、「米本土全域が射程圏内」となったことを明示したことを考えれば、戦術ミサイル武器と戦略ミサイル武器は射程を延伸する形で段階的に開発が推進されており、この意味では計画性をもって一体的に開発が推進されていった可能性がある。

火砲等の練度向上と戦術・戦略ミサイル開発が一体的に推進されたとしても、これらの火力にはそれぞれ

役割があることから運用も一体的になさるとは限らない。しかし、それぞれの役割があるからこそ、それぞれが火力戦法全体の一部を担っているという見方はできる。

事実、それまでの火砲の練成成果や戦術・戦略ミサイル武器開発の成果を確認するかのように、2022年9月25日から10月9日にかけて、米韓軍の軍事演習に対して警告を送るために砲身砲、放射砲（240mm及び600mm多連装ロケット砲）、戦術ミサイル、戦略ミサイル等が一連の流れで発射され、これらの目標が南朝鮮作戦地帯内の飛行場、軍事指揮施設、港湾さらには太平洋上にあることが同時に明示された⁹⁹⁾。

振り返ってみれば、金正恩が不満を抱いた可能性がある延坪島砲撃において使用された2種類の火器、すなわち「砲身砲（砲撃当時は76.2mm海岸砲が主体とされる。）」と「放射砲（砲撃当時は122mm多連装ロケット砲が主体とされる。）」について¹⁰⁰⁾、前者は練度が向上し、後者に至っては、当時はなかった射程と打撃力が強化された300mm・600mmの多連装ロケット砲が誘導弾付きで開発されたことになる。

以上のように、戦術ミサイル武器の開発という精密打撃能力の強化と並行して、「名射手・名砲手運動」も推進されていった理由は、それらが技術と人的練度という異なる特性がありながらも、金正恩が火力発揮手段としては同質かつ同等のものとしてとらえ、戦場の第一線から南朝鮮作戦地帯内の精密射撃・打撃能力を盲点が生じないよう一体的に向上させていったためであったと言える。

そして、これらが最終的には米本土まで射程に収める核兵器と戦略ミサイル武器の開発と呼応するように推進され示威されていったことを考えれば、「名射手・名砲手運動」は、戦術・戦略ミサイル武器と共に精密射撃・打撃能力向上の一翼を担う意味で火力戦法全体の強化に資する意義があったといえる。

（5）小括

「名射手・名砲手運動」は、確かに金日成時期からの訓練指導の継承発展という意味では、射撃の訓練練度向上に資する意義があったと言える。しかし、それ以外にも、指揮官の率先垂範能力向上を図り指揮官の統率能力向上に資する意義、将兵に対して目標と誇りを付与し将兵の士気高揚に資する意義、精密射撃・打撃能力向上の一翼を担う意味では火力戦法全体の向上に資する意義があつたことを明らかにすることができた。

つまり、この運動は、当面の射撃練度向上という戦術的意義とともに、指揮官の統率能力向上、将兵の士気高揚という人事施策的意義、火力戦法全体の強化という作戦戦略的意義という次元が異なる複数の意義を有する運動であったといえる。

では最後に、なぜ、「名射手・名砲手運動」には、訓練練度向上以外にも多くの意義が込められたのであろうか。まず、指揮官の統率能力向上施策、すなわち指揮官の率先垂範は、朝鮮人民軍創設前から、その前身である保安幹部訓練部隊に対して「部隊に厳格な規律と秩序を確立する上で、指揮官達が『以身作則』（身を持って範を示す）することはとても重要¹⁰¹⁾」（括弧内筆者補足）であることが金日成の演説などにより述べられ、射撃に関する将校の率先垂範も主張されていた¹⁰²⁾。しかし、金正日期には、金日成の遺訓という形以外では、このような指揮官の率先垂範は強調されず、金正恩期に入り陸軍・海軍・航空軍の高級指揮官に対して射撃術以外でも率先垂範を促していたことを考えれば、金正恩期に入ってから再度強調された施策であったといえる。

また、将兵の士気高揚施策、すなわち競技会を多用した訓練やその成果に対する褒賞は、金日成期には見られたが、金正日期にはあまり見られなかったことから、金正恩期に入ってから再度多用され始めた訓練指導法であり、同じ時期、航空軍の航空操縦士に対しても手厚い待遇を行ったことを考えれば、これも金正恩期に入ってから強調された施策であったといえる。

更に、火力戦法全体の強化施策、すなわち拳銃・小銃から戦術・戦略ミサイルに至るまでのあらゆる精密射撃・打撃能力向上は、金正日が陸軍部隊の機械化など機動部隊の能力向上を重視していたこととは対照的であり、金正恩期に入ってから見られ始めたことから、これもやはり金正恩期に入って強調された施策であつ

たといえる。

したがって、「名射手・名砲手運動」について、訓練練度向上に資する意義が金正恩の射撃・打撃訓練練度の不満に起因していたことと同様に、その他の意義も金正恩期に入り初めて強調されたととらえることができるならば、これらの意義は、金正恩が政権継承後に行った軍改革の一部であったとして解釈することができる。

おわりに

本稿は、「名射手・名砲手運動」には、どのような意義が込められていたのだろうかという問い合わせ立てて分析を行った。

その結果、第一に、「名射手・名砲手運動」は、2012年から2013年にかけて創始され、2014年の「新年辞」において明文化され、競技会や現地視察における褒賞等を通じて推進され、2021年の朝鮮労働党規約改定で党の事業の一つとして位置づけられていったことがわかった。これにより、これまで先行研究では検討されていなかった「名射手・名砲手運動」が創始・成立し、実践・定式化されていった経緯について明らかにすることができた。

第二に、これらの経緯から、「名射手・名砲手運動」には、将兵の基礎動作と部隊の基本的行動を徹底するという射撃の訓練練度向上に資する意義だけではなく、指揮官の率先垂範能力向上を図り指揮官の統率能力向上に資する意義、将兵に対して目標と誇りを付与し将兵の士気高揚に資する意義、精密射撃・打撃能力向上の一翼を担い火力戦法全体の強化に資する意義があったことを明らかにすることことができた。

第三に、「名射手・名砲手運動」にこのような多くの意義が込められた理由は、金正恩が政権継承後に朝鮮人民軍に求めた軍改革の一つであったと解釈することができるためであることがわかった。

これらにより、当初の出発点となった問題認識、すなわち、そもそも北朝鮮では金正恩政権発足以降、核・ミサイル装備などの開発が重視され、技術に立脚した精密打撃能力が強化され始めていたにもかかわらず、なぜ不安定な人的練度に依存する将兵個人や砲兵部隊の射撃能力向上も同時に追及されていったのであろうかについては、その理由が射撃能力向上と戦術・戦略ミサイル武器の開発がそれぞれの役割を持ちながら一体的に推進されていたためであったことがわかった。

ただし、本稿は、次のような課題もある。第一に、金正恩が行った軍改革の全体像からこの運動の意義を分析する必要性である。「名射手・名砲手運動」には多くの意義が込められたが、その背景には、後継者としての準備期間が比較的短かった2011年末に、突然政権を継承することとなった金正恩が行わざるを得なかつた大胆な軍改革という文脈が見え隠れする。本稿は、「名射手・名砲手運動」の解釈について、まず経緯を把握したうえで論点を抽出し、そこから意義を見出す帰納的手法をとったが、そもそも、金正恩が政権を継承した以降、いかなる軍改革を行ったのかという視点から網羅的に分析し、各軍種・兵種の一つとして砲兵に関する編成・装備、運用に関する変化を分析することで、より漏れのない包括的な分析が可能になるといえる。

第二に、金正恩が主張する「人民大衆第一主義」から「名射手・名砲手運動」を分析する必要性である。「名射手・名砲手運動」は、2021年1月の朝鮮労働党第8次大会で改定された党規約に、「呉仲洽7連隊称号獲得運動」、「近衛部隊運動」と共に、朝鮮人民軍内の各級党组织が行う事業として位置づけられ定式化されることとなった。これは、金正恩が金正日期の「先軍政治」から離脱し「人民大衆第一主義」を進める中で、この運動をその大衆運動の一つとして位置付けるものであった。

そうであるとするならば、「名射手・名砲手運動」は、金正恩が主張する人民大衆第一主義実現の有力な手段の一つという位置づけとなる。この点において「名射手・名砲手運動」には、どのような意義が込めら

れていたのかを明らかにすることは、「人民大衆第一主義」の性格を把握するうえで意義のある分析であり、この点で分析を深める余地があるといえる。

第三に、金正恩の砲兵重視思想を踏まえれば、北朝鮮の作戦ドクトリンに変化が生じたのではないかという分析を行う必要性である。そもそも金正日の軍改革上の功績の一つは部隊の機械化であり、どちらかといえば砲兵よりは戦車部隊等の機動部隊の訓練指導を重視していた。しかし、金正恩は、機動部隊の訓練指導は優先順位を落とす一方で砲兵運用を重視し、砲兵運用については機動部隊の火力支援ではなく、延坪島などの西海五島を中心に島嶼部に火力を指向する独立的な砲兵運用を重視する姿勢を見せており、これがまさに「主体的な砲兵戦法」ではないのかという推論もできる。

このことは、重視する作戦運用が、韓国に対する機動部隊による内陸部の電撃侵攻よりも、短距離の火砲、中長距離の戦術・戦略ミサイルなどあらゆる火力を活用した韓国、在韓・在日米軍基地、米本土に対する火力指向にあると解釈することもできることから、「名射手・名砲手運動」も含めて北朝鮮の作戦ドクトリンに変化が生じたのではないかという視点で分析を深める意義があるといえる。

注

¹⁾ 「名射手・名砲手運動」が創始された時期は、金正恩による軍部隊等視察によりその実施内容が具体的に報道され始めた時期より早く、2012年1月以降として『労働新聞』記事において説明されている。『労働新聞』2023年2月4日。

²⁾ このように、国家指導者が軍部隊等の教育訓練の細部について指導を行うことは、西側諸国にとっては不自然に感じられるが、北朝鮮においては、絶対的地位にある国家指導者が政治・経済・軍事などあらゆる分野で、現地指導等の場において「教示」を与えて、直接的な指導等を行うことは金日成期から一般的となっている。

³⁾ 2009年10月5日の毎日新聞記事において、金正恩が後継者として報道される頃『尊敬する金正雲大将同志の偉大性教養資料』が配布されたことが報道され、その全訳が毎日新聞ネット版で掲載された。その中で金正恩は、「砲兵分野に非常に明るく」、「数発の銃弾を一つの穴に通過させる非凡な射撃方法を持っている」と紹介されている。

<https://www.dailynk.com/%EB%A7%88%EC%9D%B4%EB%8B%88%EC%B9%98-%EB%B3%B4%EB%8F%84-3%EB%82%A8-%EA%B9%80%EC%A0%95%EC%9D%80-%EC%9A%B0%EC%83%81%ED%99%94-%EA%B0%95/>

⁴⁾ 2012年2月16日『労働新聞』において、インド主体思想国際研究所理事長名の記事の中で「金正恩領導者の非凡な知力と領軍術により敵の挑発は挫折に会い延坪島は火の海となった」という内容が紹介され、これをもって延坪島砲撃の首謀者を金正恩とする報道が韓国で見られた。『労働新聞』2012年2月16日。

⁵⁾ 本稿では、火器の種類に関する混乱を避けるため、拳銃・自動小銃・火砲などの個人・部隊の練度に依存する火器についての火力発揮を「射撃」と呼称し、ミサイルなどの戦術誘導武器・戦略誘導武器の火力発揮を「打撃」として区分する。

⁶⁾ 数少ない論稿の中で、チョン・ホンヨンは、北朝鮮の火力による戦法について、近年、北朝鮮が自走砲などの砲身砲よりも放射砲（多連装ロケット砲）の大口径化、弾頭の誘導化に努力してきたとする装備上の変化に言及している。チョン・ホンヨン「北韓の新型ミサイル及び砲兵戦略評価」『月刊北韓』北韓研究所、2023年5月、44-45頁。

⁷⁾ 「名射手・名砲手運動」に関する報道は、例えば「今月に入り既に3回目、北金正恩軍射撃競技観覧訪れた理由は？」『ヘラルド経済』2014年3月19日、

<https://biz.heraldcorp.com/military/view.php?ud=20140319000422&cpv=1>、情勢報告は、例えば『週刊統一情勢』統一研究院、2015-2。

⁸⁾ 『労働新聞』2023年2月24日。

⁹⁾ 『労働新聞』2013年2月21日。

¹⁰⁾ 『労働新聞』2013年3月24日。

- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 北朝鮮では、大隊長・中隊長等の軍部隊指揮官や軍部隊政治指導員を集めて、討議・報告等を行う指揮官大会が、金日成期から多く行われており、この第4次中隊長、中隊政治指導員大会もその一つとなる。『労働新聞』2013年10月30日。
- 14) 『労働新聞』2023年2月24日。
- 15) この時視察した火砲は、北朝鮮国産の170mm砲と考えられる。ステイン・ミツツアー他著、宮永忠将和訳版監修『朝鮮民主主義人民共和国の陸海空軍』大日本絵画、2021年、63頁；『労働新聞』2013年3月12日。
- 16) 西部戦線の4か所は、第403軍部隊、第688軍部隊、チョド防御隊、チャンジエド防御隊、ムド防御隊であった。『労働新聞』2012年2月26日；『労働新聞』2012年3月10日；『労働新聞』2012年8月18日。
- 17) 東部戦線の3か所は、リヨド防御隊、第313大連合部隊、第318軍部隊であった。『労働新聞』2012年4月5日；『労働新聞』2012年8月28日；『労働新聞』2012年8月29日。
- 18) 『労働新聞』2012年3月4日。
- 19) 『労働新聞』2012年2月26日。
- 20) 『労働新聞』2013年10月30日。
- 21) 『労働新聞』2014年1月1日。
- 22) 『労働新聞』2014年3月12日。
- 23) 『労働新聞』2014年3月17日。
- 24) 『労働新聞』2014年3月19日。
- 25) 『労働新聞』2014年7月1日。
- 26) この時に表彰を受けた砲種は130mm沿岸砲と考えられる。ミツツアー他著『朝鮮民主主義人民共和国の陸海空軍』153頁；『労働新聞』2014年7月7日。
- 27) 『労働新聞』2014年11月5日。
- 28) 『労働新聞』2013年3月12日。
- 29) 例えば、「名砲手運動」を強調した軍部隊視察には、107mm多連装ロケット砲を装備する第851軍部隊管下女性放射砲区分隊砲射撃訓練視察などがあった。『労働新聞』2014年4月24日。
- 30) 『労働新聞』2015年1月7日。
- 31) 実際、この競技会における目標距離は1,500mであった。同上。
- 32) 『労働新聞』2016年1月5日；『労働新聞』2016年11月19日；『労働新聞』2016年12月21日。
- 33) 『労働新聞』2015年6月18日；『労働新聞』2020年4月10日。
- 34) 競技会2回については、西海岸に接する第3・4・8軍団、東海岸に接する第7・9軍団の砲射撃競技であった。『労働新聞』2020年2月29日；『労働新聞』2020年3月3日；『労働新聞』2020年3月10日；『労働新聞』2020年3月13日；『労働新聞』2020年3月21日；『労働新聞』2020年4月10日。
- 35) 『労働新聞』2020年3月10日。
- 36) 『労働新聞』2020年3月13日。
- 37) 「朝鮮労働党規約(2021.1)」「北韓法令集上」韓国国家情報院、2022年10月、68頁。
- 38) 『労働新聞』2018年9月20日。
- 39) むしろ、2019年の第2回米朝首脳会談の決裂以降、砲兵力量を強化するための措置が一層集中されていきととらえる論考もある。イ・ホリョン「北韓党創建75周年閱兵式を通じ現われた北韓軍の政策と位相」『月間KIMA(33号)』韓国軍事問題研究院、2020年11月。
- 40) 『労働新聞』2017年11月29日。
- 41) 表に記載する行事等は、「名射手・名砲手運動」に関する初の説明、記載、褒賞などの重要結節及び射撃に関する競技会を記載した。
- 42) 『労働新聞』2015年12月5日。
- 43) 例えば陸軍部隊の視察について、金正日期の最後の3年間は砲兵部隊の視察が10%程度であったことに対し、金正恩期の最初の6年間は砲兵部隊の視察が40%へ増加していたことに象徴される。これは『労働新聞』に関する筆者の2009年～2017年の軍部隊視察の統計分析による。また、金正日の軍改革上の功績の一つは、陸軍部隊の機械化であり、このことは、金正日が「歩兵の打撃力と機動力を高め、砲の自行化(自走化)を実現した」として北朝鮮書籍でも紹介されている。『嚮導の太陽金正日將軍』平壌出版社、1995年、

374 頁。

⁴⁴⁾ 火砲の 500 門増加は、ミリタリーバランスの 2012 年版と 2022 年版を比較したもの。The International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 2012*, Routledge, March 6, 2012, p. 257; The International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 2024*, Routledge, February 13, 2024, p. 282, ただし、韓国の国防白書では、同じ期間に戦車は 100両増加し火砲は 900 門増加したとしている。『2012 年国防白書』大韓民国国防部、2012 年、289 頁；『2022 国防白書』大韓民国国防部、2023 年 2 月、334 頁。

⁴⁵⁾ 金日成「保安幹部訓練所の当面課題—保安幹部訓練所第 2 所軍官会議で行った演説—（1947 年 1 月 15 日）」『金日成著作集 3』朝鮮労働党出版社、1979 年、24 頁。

⁴⁶⁾ 同上。

⁴⁷⁾ 金日成「軍人達を百戦百勝の名砲手に育てよう—朝鮮人民軍第 395 軍部隊砲兵区分隊軍官達の前で行つた演説—（1948 年 2 月 20 日）」『金日成著作集 4』朝鮮労働党出版社、1979 年、127-128 頁。

⁴⁸⁾ 同上。

⁴⁹⁾ 金日成「党、政権機関、人民軍をさらに強化し、社会主義大建設をりっぱにおこなつて革命的大事変を成功裏に迎えよう—朝鮮労働党中央委員会第五期第十回総会での結語—（1975 年 2 月 17 日）」『金日成著作集 30』外国文出版社、1987 年、74 頁。

⁵⁰⁾ 金正日「中隊長達の役割を高め人民軍隊の中隊強化で新しい転換を成し遂げよう—朝鮮人民軍指揮成員達、模範的な中隊長達と行った談話—（1999 年 3 月 1 日）」『金正日選集 19』朝鮮労働党出版社、2013 年、474 頁。

⁵¹⁾ 第 323 軍部隊は、韓国の報道で航空軍特殊部隊である「航空狙撃旅団」であることが知られている、「北金正恩、核実験後最初に軍部隊訪問理由は」連合ニュース、2013 年 2 月 21 日、
<https://www.yna.co.kr/view/AKR20130221066600014>。

⁵²⁾ 第 1973 軍部隊は、韓国の報道で陸軍特殊部隊である第 11 軍団隸下の部隊であることが知られている、「北金正恩、人民軍 1973 軍部隊傘下大隊視察」連合ニュース、2013 年 3 月 24 日、
<https://www.yna.co.kr/view/PYH20130324013300013>。

⁵³⁾ 『労働新聞』2013 年 7 月 1 日。

⁵⁴⁾ この記事は、労働新聞に掲載された軍部隊視察の記事の中で、視察が多かった 2012 年から 2017 年の 6 年間で、金正恩が行った唯一の「叱責」を掲載した記事であり、上級部隊の東部戦線第 1 軍団長が一階級降格、4 月 25 日付で関連部隊が解散され幹部 167 人が降格させられたと言われている。統一ニュース 2014 年 11 月 4 日、<https://www.tongilnews.com/news/articleView.html?idxno=109622>；『労働新聞』2014 年 4 月 26 日。

⁵⁵⁾ 当時の砲射撃競技の基準は、目標板に命中させた「射撃成績」と「火力任務遂行にかかる時間」であった。『労働新聞』2016 年 1 月 5 日。

⁵⁶⁾ 同上。なお、このことは、人民武力部に対する演説の中でも金正恩が強調した。『労働新聞』2016 年 1 月 10 日。

⁵⁷⁾ 「国防部“北韓 170 余発砲撃…80 余発が延坪島に落ちた”」『朝鮮日報』2010 年 11 月 24 日、
https://www.chosun.com/site/data/html_dir/2010/11/24/2010112400667.html。

⁵⁸⁾ この実弾射撃訓練においては、延坪島西防衛部隊本部、第 6 海兵旅団本部、ハープーンミサイル発射基地、90 mm 戦車砲陣地、155 mm 自走砲中隊、電波探知機哨所、130 mm 多連装ロケット砲陣地を模した軍事目標が定められた。『労働新聞』2013 年 3 月 14 日。

⁵⁹⁾ 文在寅『辺境から中心へ—文在寅回顧録：外交安保編』キムヨン社、2024 年 5 月、294 頁。

⁶⁰⁾ 『嚮導の太陽金正日將軍』374 頁；『労働新聞』1992 年 10 月 29 日。

⁶¹⁾ 金正日が晩年の 3 年間で行った軍公開活動のうち、最も多かったものは軍人による舞台公演観覧であった。他方、軍部隊視察は近傍でかつ限定的に行われた。

⁶²⁾ 『労働新聞』2013 年 10 月 30 日。

⁶³⁾ 『労働新聞』2014 年 3 月 12 日。

⁶⁴⁾ 『労働新聞』2014 年 3 月 17 日。

⁶⁵⁾ 金日成「軍官達は部隊の戦闘力強化で核心的役割を果たさなければならない—第 1 中央軍官学校第 2 回卒業式の祝賀宴で行った演説—（1948 年 10 月 14 日）」『金日成著作集 4』朝鮮労働党出版社、1979 年、457 頁。

⁶⁶⁾ 『労働新聞』2014 年 11 月 5 日。

⁶⁷⁾ 『労働新聞』2015 年 4 月 26 日。

- 68) 『労働新聞』2014年7月2日。
- 69) 『労働新聞』2014年6月13日。
- 70) 『労働新聞』2015年1月27日。
- 71) 『労働新聞』2014年7月2日。
- 72) この発言は、陸軍・海軍・航空軍部隊訪問時に行っている。『労働新聞』2014年7月2日；『労働新聞』2015年1月27日；『労働新聞』2017年6月5日。
- 73) 『労働新聞』2013年3月26日。
- 74) 『労働新聞』2015年1月7日。
- 75) これら競技会は、2012年から2020年の『労働新聞』において記事として紹介されたものであり、競技会すべてを列挙しているとは言えないことに注意。『労働新聞』2016年3月11日；『労働新聞』2017年4月1日；『労働新聞』2016年1月5日；『労働新聞』2016年11月19日；『労働新聞』2015年1月7日；『労働新聞』2014年6月13日；『労働新聞』2015年7月30日；『労働新聞』2016年12月4日；『労働新聞』2016年12月21日；『労働新聞』2017年6月5日；『労働新聞』2017年4月13日；『労働新聞』2017年8月26日；『労働新聞』2020年3月13日；『労働新聞』2020年3月21日；『労働新聞』2014年3月17日；『労働新聞』2015年6月18日。
- 76) 金日成の業績を説明する北朝鮮書籍の中で、金日成が「軍人達の射撃術を高めるため（中略）、定常的に軍種、兵種、区分隊、部隊単位で射撃競技大会を組織するようにする賢明な処置」を採ったこと、「優秀な単位には最高司令官命令で表彰も行い記念写真も撮ったこと」を説明している。『偉大な首領金日成同志の不滅の革命業績9 主体型の革命武力建設』朝鮮労働党出版社、1998年、350～351、399頁。
- 77) 『労働新聞』2020年3月21日。
- 78) 『労働新聞』2012年1月21日；『労働新聞』2012年1月31日；『労働新聞』2014年10月30日；『労働新聞』2015年2月2日；『労働新聞』2015年3月9日。
- 79) 『労働新聞』2013年3月12日。
- 80) 金正恩が砲兵の士気振作に着意していたとする解釈は、韓国側の報道でも指摘されている。「金正恩砲兵大会は砲兵士気振作用」自由アジア放送、2015年12月11日、
https://www.rfa.org/korean/in_focus/nk_nuclear_talks/artillery-12112015153910.html。
- 81) これは、「朝鮮人民軍戦車兵競技会－2016」における金正恩の発言であった。『労働新聞』2016年3月11日。
- 82) 『労働新聞』2014年6月27日。
- 83) 『労働新聞』2015年2月7日。
- 84) 『労働新聞』2015年5月9日。
- 85) 『労働新聞』2016年2月27日。
- 86) 『労働新聞』2016年4月2日。
- 87) 『労働新聞』2016年3月4日。
- 88) この内容は、労働新聞記事「全軍に力強く燃える大衆運動の波」の中で紹介されている。『労働新聞』2023年2月4日。
- 89) 『労働新聞』2016年3月4日。
- 90) 「北朝鮮、延坪島にコンクリート貫通型特殊爆弾を発射」聯合ニュース、2010年11月25日、
<https://www.yonhapnews.co.kr/view/MYH20101125006800038>。
- 91) 『労働新聞』2017年5月30日。
- 92) 『労働新聞』2019年5月5日。
- 93) 『労働新聞』2016年1月5日。
- 94) 北朝鮮の核・ミサイル開発の概要は、防衛省『令和5年度版日本の防衛』及び防衛省防衛研究所『東アジア戦略概観』2014年を参照。
- 95) 『労働新聞』2016年6月23日；『労働新聞』2017年2月13日。
- 96) 『労働新聞』2017年5月22日。
- 97) 『労働新聞』2017年7月29日。
- 98) 『労働新聞』2017年11月29日。
- 99) 『労働新聞』2022年10月10日。
- 100) 「『韓半島新武器大百科』砲を良く知る金正恩、なぜ14年前旧式延坪島砲発射反復？」自由アジア放

送、2024年1月14、

https://www.rfa.org/korean/weekly_program/c2e0bc15d55cd55cbc18b3c4c2e0bb34ae30b300bc31acf/armencyclopedia-01122024104716.html。

¹⁰¹⁾ 金日成「保安幹部訓練所の当面課業—保安幹部訓練所第2所軍官会議で行った演説—（1947年1月15日）」『金日成著作集3』朝鮮労働党出版社、1979年、27頁。

¹⁰²⁾ 金日成「軍官達は部隊の戦闘力強化で革新的役割を高めなければならない—第1中央軍官学校第2期卒業式祝賀宴会で行った演説—（1948年10月14日）」『金日成著作集4』朝鮮労働党出版社、1979年、457頁。